金糸の煙草

4

金糸の煙草　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19148856

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, 電気責め, ♡喘ぎ, もぶお兄さん×霊幻

完結しました。ヨシ霊です。師匠総受けです。電気責め、もぶお兄さん×師匠もちょっと含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

金糸の煙草　４

「ごめん！」
見張りをしてるビルの屋上に霊幻新隆が来たと思ったら、開口１番そう叫ばれて一瞬呆気に取られる。
が、その後ろから殺気立った影山茂夫や芹沢克也、憑依体エクボや影山律、花沢輝気や鈴木将が出てきて全てを察した。
ははーん。
リンチだな？
俺の脳裏に走馬灯が駆けていく。
このメンツは無理。世界征服も夢じゃ無いメンバーだぞ。見ろ、逃げないようにバリアまで張られたじゃねぇか。
「ヨシフさん、初めまして。僕、影山茂夫といいます」
めっちゃ存じ上げております。
「霊幻新隆さんの弟子をしております」
『弟子』を凄く強調してくる。
「本日は僕の大事な命に替えても守るべき至宝の師匠についてご確認したいことがありまして、僭越ながらバリアを張らせていただきました。核弾頭が直撃しても話し合いが中断されることはないので、ご安心ください」
うん。すごく安心できねえな。それにしても一生の内に聞く事ない言葉の組み合わせだな、僭越ながらバリア張るっての。
「何いってんのお前……ごめんなヨシフ、お前から貰ったホルダーに刻印があったの知らなくて……机にポンと置いてたら、モブにプレゼントだってバレちまったんだよ。モブのやつ心配症でさ〜、俺の恋人がどんな人か微に入り細に入り確認するまで安眠できないとか言い出して」
いや、お弟子さんむしろ俺を永眠させるのが目的みたいな顔してるけど。
シガレットホルダーの刻印はちょっとした虫除けのつもりだったんだが、余計な所を刺激しちまったみたいだ。
「それで、ヨシフさん。あなたが師匠をもてあそんでいるというの

は本当ですか？」
いやなんで遊び前提で話してくるんだよ。
「いや、真剣に交際させて貰ってるが」
「本名も、住む所も明かしてないのに？」
うっと黙る。
「いや仕方ねえだろ、仕事がスパイなんだから」
呆れたように霊幻が助け舟を出す。
「そもそもなんですか、仕事がスパイって。そんなの日本にいるんですか？師匠騙されてるんじゃないですか」
「モブ、お前、日本をなんだと思ってんだ……諜報活動ぐらいしてるに決まってるだろ」
「ちょうほう活動？」
「国の安全に関わる情報を集めることだ。どことどこが戦争しそう、とかそういう事を潜入調査する」
「ヨシフさんはそういうことをしてるんですか？」
「そうだ。自衛隊に所属して国の安全のために働いてる」
「え、公務員なんですか……！？」
超能力者たちがざわざわする。日本人は何故か公務員という言葉に弱い。なんか世界征服できる生物兵器たちが公務員って単語でビビってんのウケるな。緊迫してる状況だけに余計笑いそうになってきた。
「くっ……で、でも師匠のお金目当てかも知れませんし……！」
「俺、霊幻新隆に金借りた事ねーけど。つーか、下世話な話になるけど、諜報の給料って危険手当入るから、一本超えだぜ。金には困ってねーよ。むしろ俺が貢ぐ方じゃね？」
「師匠、一本超えって何ですか」
「……年収一千万超えるってことだ」
「いっ……！！」
また人類最終生物兵器どもがざわざわしてる。年収でビビる対国家レベル兵器、ウケんな。
「まいったな……勝てる要素が無い……」
いや超能力ならお前らの圧勝だけど。何の話だっけ、これ？
「それでも……僕の方が師匠のことを愛しています！！師匠、僕を

選んでください！！」
がしっ、と影山茂夫が霊幻の手を掴む。
「へ？」
ぽかんとする霊幻の別の手を芹沢が同じように掴む。
「霊幻さん……俺、俺……霊幻さんのこと、大事にします！気持ちでは負けてないつもりです！俺を選んでください！！」
「は？」
完全に霊幻が固まっている。その両肩をエクボが掴む。
「霊幻……俺様、お前の支えになりたいと思ってる。お前のことはお前自身より分かってるつもりだ。俺との未来を選んでくれ」
「は？はあ？」
エクボを押し退けて花沢輝気が霊幻新隆の前に立つ。
「……っ、……っ、……っ、好きです！！」
うわ、顔真っ赤でガチ感１番凄いな。
「は？は？は？」
霊幻新隆は困惑しかしていない。なんだこれ。告白のフォークダンスか？オクラホマ・ミキサー流してやろうか？
「霊幻さん……あんたの面倒をみてやれるのは僕ぐらいですよ。僕にしておいた方がいい」
次は影山律が前に立つ。
たらららったらったっらー♪
「あんただけは俺のこと……そういうとこも含めて分かってくれてると思ってたけど、やっぱ言葉にしなきゃだめだよな？俺と所帯持ってくれよ」
最後は鈴木将だ。
たらららったらったんたん♪
何故か超能力者たちの目が俺に注がれている。
「えーと……これからもよろしく？」
「……うん」
はにかんで霊幻が俺の手を取ったものだから、ぴしゃああんとカミナリでも落ちたかのように超能力者たちがくずおれる。
らったった♪フォークダンスは俺で終わりだ。
「師匠……なんでその人なんですか……」

「え、いやそもそもお前ら俺のこと好きだったの？初耳すぎて理解が追いついてこないんだけど」
「そこからですか！？わりとあからさまだったと思うんですけど！？」
「……いやそれ察しろはちょっとお前ら俺に甘え過ぎだろ……うーん……」
霊幻があからさまに策をろうした顔を唇を触りながらした。
「ヨシフは顔がめちゃくちゃ好みだった。一目惚れだ」
超能力者たちが再びくずおれる。
なるほど。下手に人柄とかに触れると食い下がられるから、どうしようもないところで落としたな。
「じゃあ……見れない顔になれば１００年の恋も醒めるってことだな？」
ゆらり、と上級悪霊エクボが立ち上がる。
俺はタバコを手に身構えた。
「あ、エクボ、ヨシフに危害を加えるのはやめといた方がいいぞ。俺の首が爆弾で吹っ飛ぶから」
さらり、と霊幻が伝える。
「は……？」
エクボがぴたりと固まる。
霊幻がしゅるりとネクタイを抜き取り、ぷちぷちとシャツのボタンを外していく。
突然のストリップに不快にも皆が生唾を呑む中、霊幻がシャツをくつろげた先には。
心臓の上に、まだ新しい赤い十字架形の傷が刻まれていた。
「お前たち超能力者が人に危害を加えようとしたり、市街を破壊しようとしたりしたら、ここに埋め込まれた爆弾が爆発することになってる。この間政府と密約をしたんだ。その代わり、お前ら能力者の自由は保証される、ってな。……まあ、普通に暮らしてたら関係ない話だから、あんま気にすんな」
霊幻新隆は微笑んでいるが、超能力者たちは真っ青になって固まっていた。
「お前……」

一際青い顔をしてエクボがふらふらと霊幻に近づく。
「んっ」
十字架傷に指で触れて内部を探ったらしい。ぴくりと霊幻が反応してひくりと俺の頬が引き攣った。勝手に触るんじゃねぇという言葉をスパイの俺が呑み込む。
「……心臓に爆弾のコードが絡んで、一部癒着してやがる。取り出そうとしたら心臓ごとだ。……取り出すのは不可能だ」
ちっと大きくエクボが舌打ちする。
「……なんでテメェが犠牲になってんだよ。もっと他にあっただろ、俺たちを制御する方法なら」
エクボがそっと霊幻を抱きしめる。頬が引き攣りかけたが、訓練したポーカーフェイスで乗り切った。
「お前たちみんなに爆弾が埋め込まれるぐらいなら、俺１人の方が効率的だろ？いい方法だと思ったんだが」
「……馬鹿野郎。最悪のトロッコ実験しやがって」
エクボが膝を折って霊幻新隆に縋り付く。聖母像にすがる祈り手のようだった。
「絶対にお前が吹っ飛ぶようなことはしねえ。あいつらにもさせねえ。俺が言うまでも無いくらいだ。──頼むから、もっと自分を大事にしてくれ」
自分に縋り付くエクボの髪を霊幻が優しく撫でる。
「俺は自分のためにこの方法を選んだんだ。お前らと同じだよ。『お前に爆弾が埋め込まれるぐらいなら、自分に埋め込んでくれた方が良い』……そう思ったから、そうしただけだ。はは、早いもの勝ちだ」
絶句する。霊幻新隆は超能力者たちの気持ちをよく理解しているし、そして絶望的なまでに、超能力者たちを愛していた。歯痒いことに、その愛の大きさは貰ったものしか分からないたぐいのもので、与えた側からは些細なことにしか見えないものだった。
そこまでいくともはや、神の愛だ。人が報いる事ができない、十字架の傷。
「師匠……師匠、僕はどんなお礼をすれば良いんですか……こんな、こんな大事なことを、１人で勝手に決めて……責任取って結婚

しますね」
おいコラ何さりげなく口説いてやがる。
「あ、こらヨシフ。ヨシフも迂闊に人に超能力使うなよ？俺たちが付き合ってることはもう上層部には筒抜けなんだろ？ヨシフも『俺の周りの超能力者』の１人になるんだから、超能力で悪いことしたら俺の首が吹っ飛ぶんだからな」
あ。
そうか。
霊幻の生命は、俺の行動にも、かかって――。
カタカタと、手が震える。
霊幻が死ぬ。罪の無い俺の恋人が、俺のせいで死んでしまう。その想像だけで、恐怖が溢れ出てしまった。こんなのは初めて同僚が死んじまった時以来だ。
あの時も、俺のミスで――
「ヨシフ」
霊幻が俺の口にラッキー・ストライクをさして、マッチで火をつけてくれる。
「俺は死なねえよ。悪運だけは強えんだ。それに、頼れる知り合いがいっぱいいる」
霊幻はタバコを吸えないでいる俺の唇からタバコを取って吸い、ふうっと煙を口移してきた。
「大丈夫だ。なんてったって俺が吸ってるのは『ラッキー・ストライク』だぞ」
にっと笑われて肩の力が抜ける。
「……情け無いところを見せたな」
霊幻から貰ったタバコを大事に吸う。
「ま、恋人が爆殺されるかもしれないのに平然としてる男じゃ
ねぇってことは、マシだと認めてやるよ」
エクボが吐き捨てた。

※

「……報告は以上です。本官はターゲットと肉体関係を持ち、交際

しました。ターゲットが超能力者を惹き寄せるフェロモンを出している可能性は、否定できない結果となりました」
市ヶ谷の会議室で、２０人ほどの上官相手に報告する。今日はやけに多いな。なんかやたら偉い人まで来てないか？なんで陸将補まで来てんだ。
「報告ご苦労。それで、ここからが問題なのだが、コードネーム『ヨシフ』よ」
なんだ？空気がピリつく……！
「我々上層部は、君と霊幻新隆の結婚を強く推奨する」
「はあ？……あっ失礼しました」
何を言い出すんだこのオッサンたちは。思わず素が出ただろうが。
「君も知っているとは思うが、自衛官の彼女に逃げられる率はかなり高い。そして、退役官が孤独死する率もだ」
オイ続けんのかよ二佐。
「良く考えたまえ、ただでさえ出会いの少ない自衛官が、今付き合ってる女性よりレベルの高い女性に出会って付き合える可能性はかなり低い。今の目の前の相手がお前が出会える最高レベルの女性だ。付き合おうと思える相手ならさっさと結婚した方がいい」
「失礼ながら閣下、暴論です」
ほんとに勤務時間中に何言ってんだこのオッサンどもは。
「結婚式ともなれば我々も出席すべきだからね、予定を伝えに今回は顔を出した訳だが」
そ　れ　で　こ　の　人　数　か　よ！
「ヨシフくん、君は薩摩出身かね？」
「いえ……」
「こんな言い伝えがある。『獲物を罠にかけたままにしておくな』」
「……はあ」
タバコ吸ってイっすかね。
「交際してる段階なんて相手が罠にかかってるだけのようなものだ。一般の職業の男みたいに罠が壊れてないか、誰か他の男が獲物を横取りしようとしていないか、マメに確認できるならいい。だが我々自衛官は違う。特に潜水艦乗りや諜報の君は数ヶ月、数年会え

ないこともあるだろう。しかも予定すら伝えられない」
「……」
いやまあそれは、この職業の宿命だからな……。
「その間に罠は錆びて壊れて、獲物は逃げるか奪われてしまうんだよ。スパイ三原則を知っているだろう。『恋人を作るな、必ず別れる』」
ドキリとする。霊幻の見張り任務もあと少しで終わりだ。張り付きが終われば、会えるのは１か月に１回あるかどうかになる。
「私はあえてこのスパイ三原則に蛇足をつけよう。『だから恋人を作ったのならさっさと妻にしてしまえ』と。獲物が罠にかかったのなら、すぐ止めを刺すんだ！」
二佐が万年筆を振り下ろすマネをする。
「籍を入れろ。式を上げろ。自衛隊家族寮に囲い込め。逃げるのがめんどくさい状態まで落とし込むんだ。獲物に隙を見せるな！」
やたら興奮してるな、二佐。もしかして……
「でないと私みたいに……５年付き合ってプロポーズしようとした矢先にフラれたりするんだ……くぅっ」
俯いた二佐の目から熱い雫が垂れて辟易する。
「逃すな抑え込んで縛って繋いで拘束してくびきをつけて止めを刺して外堀なんか埋めてる暇はない、本丸を燃やせ！！」
「……サー、イエッサー」
俺は呆れた顔で二佐を見ながら敬礼する。
「話が終わりなら退室しますよ」
「……以上だ。行ってよし」
ったく……なんなんだ、先輩達は……。

と、思っていた時が俺にもあった。

本人には言えないが、霊幻の見張り任務は一旦終了になり、しばらく俺は会えなくなる。
だから特別に俺の隠れ家にしてる唐揚げ屋に霊幻を連れて来てデートしていた。
「でさー、そんときモブが……で、エクボがさぁ、そんなこという

から……そしたら芹沢がなんて言ったと思う！？」
楽しそうにしゃべる霊幻の話は面白い。なんせ悪霊退治っていう一大エンターテイメントだからな。
だけどな。
さっきからモブだのエクボだの芹沢だのの話、しすぎじゃねぇか……？
ついイライラしてしまう。もうホテル行ってやろうか。
「あ、そろそろ時間か？」
察しのいい霊幻はさっと腕時計を見る。……ん？そんな腕時計してたか？
「どうしたんだ、それ？」
「ああこれか？モブがくれたんだ。事務所の創立記念日だから、って」
笑って見せてくれる時計の裏側に。
『LOVE Shigeo to Arataka』と刻印されていて、青筋が立った。
見れば、胸元のボールペンも新しくて高価そうなものだ。
「……ボールペンも貰ったのか？」
「あ、分かるか？これは芹沢がくれたんだ。インクを入れ換えてずっと使えるやつなんだ」
無言でボールペンを取り上げ、バラす。内側に男の名前と『Forever』の刻印。
……あいつら……！
よく見れば、ネクタイピンはエクボからのものだし、財布は花沢輝気からの贈り物だった。
霊幻はただのプレゼントと信じて疑っていないが、これは明らかに宣戦布告だ。
俺は彼女にフラれた二佐を思い出す。消防士に横取りされたと言っていた。
『獲物を罠にかけたままにして安心するな』

──なあ、みてくれよ、ヨシフ。
──これ、モブがくれたんだ。
嬉しそうに指輪を見せる霊幻の幻覚に目の前がブラックアウトし

て。

「霊幻、結婚しようか」

俺は気がつくと口走っていた。
店中が静まり返る。
やめろよ酔っ払いども、さっきまでゲハゲハ笑ってただろうが
よ！！店主もさりげなくテレビの音量落としてんじゃねぇよ！！

「これからも、俺が帰ってくる場所でいて欲しい」

面食らってる霊幻に畳み掛けてしまう。
あ、ヤバい。
胃の中に入れてるチップ吐きそう。

「……いいよ」

ふわり、と笑って霊幻が言ってくれるから。

「これからずっと、おかえり、って言ってやる」

俺は不覚にも泣きそうになった。
うそだろ。おれ、霊幻を手に入れたのか？本当に？
「うおおおお〜！！！！おめでとうニィちゃん！！こいつは俺の奢
りだ！！」
「カンパ〜イ！！」
が、そこからは店のオッサンたちのおもちゃにされてそれどころ
じゃなかった。
俺と霊幻はおっちゃん達に揉みくちゃにされてよろよろになりなが
ら唐揚げ屋を出る。
「はは……凄かったな。じゃ、ホテル行く？」
「いや、今から市役所行くぞ。時間外窓口でパートナー届出すか
ら」
「えっ」

目を白黒させる霊幻を半ば引っ張りながら市役所に向かう。逃すな。繋いで、くびきをつけろ。
「お前そんな名前なんだな……」
「絶対誰にも言うなよ」
パートナー届に名前を書かせて、俺の姓を霊幻に変える。
「結婚式、明後日だから、今から準備するぞ」
「へ〜、あさって……明後日！？」
諜報の結婚式はテロの目標にされたりしやすい。だからこんなふうに突貫でするしかない。
意外となんとかなるもので、すぐ霊幻のアパートに戻って２人で関係者に連絡しまくり、『ホテルグランドヒル市ヶ谷』に連絡したら心得たとばかりにすぐ会場が押さえられ、あの会議に出ていたお偉いさんどもは待ってましたとばかりに快く出席の返事を寄越してきた。結納品はAmazonで霊幻の実家に送りつける。無礼ギリギリだ。俺、霊幻の親父さんにぶん殴られるかもしれないな……。
深夜まであちこちに連絡した俺たちは目覚めたらすぐ式場に行って、衣装合わせと前撮りをした。俺のわがままで、ウェディングドレスと白無垢も着てもらう。惚れた欲目だとは思うが、色の白いアイツにはめちゃくちゃ似合って涙が出そうになった。その後銀座に行って指輪を買ってきてから、式の打ち合わせをする。とりあえずの指輪だ。ちゃんとしたやつは今度選ぼう。

そして。

式当日になった。

すごい。自衛官の結婚式は数がそんなにないから、始まる前から上官たちの様子がおかしい。
その反面、霊幻側の、特に超能力者達がお通夜みたいな顔をしていて一周回っておかしくなってきた。
霊幻のお父さんは最初から白目を剥いて失神しそうだ。大丈夫だろうか。
ホテルグランドヒル市ヶ谷は自衛隊の福利厚生施設でもある。自衛

官はだいたいここで式を挙げているせいか、色々と融通をきかせてくれる。男同士の挙式も快く引き受けてくれた。
それにしても。
白いタキシードに髪を横流しにし、うっすら化粧をした霊幻は……かっ…………こいいなぁ、ちくしょう。
そんな男のヴェールを霊幻のお母さんが下げる。
霊幻のお父さんが霊幻と腕を組んでいたが、何故か反対側は弟子の影山茂夫がエスコートしていた。ここは譲らなかったらしい。なんだこれ。霊幻が連行されてるみたいになってる。
「幸せになっでぐだざい……」
手を離す瞬間、実の父親よりも弟子の方が泣いている。いやほんとなんだこれ。
「新郎ヨシフは、病める時も健やかなる時も……」
誓いの言葉だ。
「はい、誓います」
何故か知らんが自衛官側からめちゃくちゃ拍手が起こった。やめろ恥ずかしい。
「新郎新隆は……」
「はい、誓います」
凛と響く声に、泣きそうになる。
その後の誓いのキスは熱いのを唇にかましてやった。頬でいいと言われていたが、構うものか。この場には、霊幻が俺の物だと明言しておいた方がいいやつが多過ぎる。
そのまま退場の運びになったが、自衛隊名物の左右に並んだ儀礼服の同僚たちによる捧げ銃と祝砲を受けながら退場する。ごつい。霊幻が目を白黒させていて可愛かった。
それに。
俺の飾緒の付いた儀礼服を見てどぎまぎする霊幻も中々よかった。この服初夜まで貸しててくれねぇかな……。
披露宴は自衛官側の席と霊幻側の席で、変な緊張感があった。何しろ霊幻側の出席者は揃いも揃ってＡランクの能力者だ。分かってる自衛官は緊張する。
霊幻側も自分が政府から目を付けられていることが分かっている能

力者──特に芹沢はソワソワしていた。
が、そんなことおかましなしに披露宴は進んでいく。超能力者達の本当にタネも仕掛けも無い手品。自衛隊のオーケストラが乗り込んできて演奏。
迫力ある式は一瞬で終わりだった。
最後に、それぞれの手紙で締める。
俺の手紙は当たり障りのない、自衛隊や家族に感謝するものだった。
だけど、霊幻の手紙は。
「俺がヨシフを好きになったのは、車がはねた水たまりの水を、ヨシフがさりげなく自分で受けてくれたからでした」
衝撃的な文面からはじまった。
「顔は怖いし、タバコはスパスパ吸ってるし、ヨシフは決して優しく見える男じゃないけれど、その行動はいつでも細やかな気配りに満ちていて、そういうところが、俺は、いいなぁって思ったんです」
俺の顔がじわじわ首から赤くなっていく。やってくれたな、コイツ。
「ヨシフの優しさは、鍛え上げられた精神と肉体から裏打ちされていて、側にいてとても安心できるものでした。いつしか危険な仕事に疲れていたのかもしれない俺には、ヨシフの隣は、とても安心できるものでした」
自衛隊のお偉いさんが目頭を押さえている。いやなんでだよ、それは花嫁の両親の役目だろうがよ。
「俺は今、ヨシフの隣にいる人間として選ばれて、幸せです」
今度は不覚にも俺が泣きそうになった。
「俺の大事な人たちにも、ヨシフのお世話になってる人たちにも、これからもご迷惑をおかけすることと思いますが、どうぞ、見守って頂けると助かります」
任せてくださぁい！と酒の入った霊幻の部下が大声で叫んで周りに止められている。
「ヨシフ。……愛してる」
ぐいっと襟を引っ張られて。

俺は初めて霊幻から愛の言葉を貰いつつ、頬に口付けを受けた。
とうとう真っ赤になった俺に、自衛官達から口笛が飛ぶ。
文句を言おうと霊幻の方を見れば、霊幻も真っ赤な顔をしていてはにかんでいて。
思わず口付けようとしたら。
「退場のお時間です」
介添えに止められてしまった。
またしても自衛隊名物のサーベルを掲げたアーチをくぐるゴツい退場だ。
式場を出て。
「研究部がデータを取りたいそうだから、このまま静岡に向かってもらうよ」
辟易した。

※

「性行為してる時のデータが欲しいから、よろしく」
何がよろしくだ。新婚に何言いやがる。だけど一兵卒の俺に断わる選択肢はない。
「あー……だそうだ、霊幻、大丈夫か？」
「いやまあいいけどさ……式の準備で俺疲れてるんだけど……」
そう言いながらも協力してくれるらしい配偶者に心の中で手を合わせる。
いつも拷問椅子が置かれているところに、大きめのベッドが置かれている。
俺と霊幻は服を脱がされ、センサー類を装着されて、いつも通りスポイトやビーカーを構えた白衣組に囲まれた。
「じゃ、始めてくれたまえ。勃たないなら言ってくれ、電流を流すからな」
そう言いながら白衣組が霊幻にしゅるりと黒い布で目隠しをする。
「色んな人に見られていると思うと集中できないだろう？フェロモンを出しやすくするためにも、行為に集中してくれたまえ」
コードだらけの霊幻がベッドに横たわり、目隠しをされて俺の手を

待っている。
倒錯的な光景にクラクラした。
チラリとコントロールルームを見ると今回はギャラリーが多い。公開ＡＶみたいなものだからな……。
「あぁっ！？」
びく、と霊幻が声を上げる。
「フェロモンが出やすいように、性感帯に電流を流させて貰うよ。ただ、絶頂は性行為で行ってくれたまえ。ほら、君が触れてやらないと、被験体はずっと寸止め状態だよ」
「くっ……」
苦しそうに身悶え始めた霊幻の頬に触れる。
「ヨシフ……？」
「そうだ、俺だ。今から抱くが、我慢してくれよ」
「ぅん……」
唇を重ねて、舌を絡め合わせる。
「あ、唾液は採取させてくださいね〜」
「あぐっ」
霊幻は口を指で開かされてスポイトで唾液を吸われていく。すまん。我慢してくれ。
「あぅっ……ああっ、んんぅっ……」
「大丈夫か、霊幻、どうしたらいい」
電流で責めたてられる霊幻の手を握る。
「ちんこ……触って……あと、挿れて欲し……」
「分かった」
ゴシゴシと霊幻の性器を擦ってやる。
「あ、あ！んぁっ♡」
びゅるる、とビニールパックに精液が流れ込んでいく。
「……霊幻、挿れるぞ」
コンドームを付けて窄まりに先端を当てる。
「きてっ……ナカが、もどかし……」
その言葉に、ずん、と性器を埋める。
びゅく、とまたビニールパックに精液が流れ込んだ。
「トコロテン……したぁっ♡」

わかった、分かったから、いちいち言うな。記録取られるんだぞ。
「ヨシフ、もっと……激しく、犯して」
拷問用の電流で追い詰められた霊幻が俺に手足を絡めて腰を揺らす。
「キスして……」
俺は霊幻の舌を吸いながら、ガツガツと腰を打ち付ける。
「あっ♡ああっ♡よしふっ♡イイっ♡さいこうっ♡すきぃ……っ♡」
霊幻の手が愛おしそうに俺の後頭部を撫でる。
「いくっ♡やだぁっ、ああああっ♡」
電流に追い詰められた霊幻が足をピンと張り詰めさせて絶頂に翻弄される。俺もそれに釣られて絶頂する。
「はーっ、はーっ♡」
胸を荒く上下させる霊幻を、白衣組の１人……心理学者が愛おしそうに手の甲で撫ぜたのに、ざわりと不快感を覚えて。
後でそれが正解だったと知る。
「じゃあ、被験体が『恋人以外に抱かれてもフェロモンを出すのか』の実験に入らせて貰う」
「なっ……！」
5人がかりで俺は拘束される。
「おっと、超能力を使えば霊幻の首が吹っ飛ぶぞ？気をつけたまえ」
白衣組が笑いながらその手のひらで霊幻の身体を辿る。
「夫以外に抱かれて、どんな顔をするのか、どんな声を上げるのか……今から楽しみだよ」
あの白衣組、横恋慕してやがったな。霊幻を触れる手つきが業務のソレじゃねぇ。身体のラインを確かめるように、性器を追い詰めるように、霊幻を愛撫する。
「……やめろ。それ以上そいつに触ったら、俺はクビ覚悟で暴れるぞ」
超能力を使わなくても、これぐらいの人数なら何とかなる。そんな訓練を受けてきた。
「へえ！それでも爆弾は作動するのかな？試してみるかい？」
霊幻の唇を撫ぜながら言う白衣組の言葉にホゾを噛む。く

そっ……。
「……契約書、３条の五、二のイ条」
さらっとした声で霊幻が告げる。
「暴行など、犯罪行為を行なわれた場合には拒否の上告訴できる。……これはれっきとした強姦行為だと思うが、どうなのかな、割崖二尉」
しぃん、と場が凍った。
「そ、の通りだな、霊幻新隆」
「ん。なら未遂の内に俺から手を離してくれ。……不快だ」
「……悪かった」
白衣組はベッドから腰を上げる。
拘束を解かれた俺は霊幻にかけより、目隠しを剥ぎ取る。
「霊幻……悪い、守れなかった」
「うるせぇ、気にすんな。自分の身くらい自分で守れる」
ああ、ああ、そうだ。そんなお前に俺も守られた。
裸の霊幻を俺は抱きしめる。
白衣組が涙を流していたが、知るものか。勝手に横恋慕してろ。

※

公園でソフトクリームを舐めながら、霊幻とたわいない話をしている。
「……ホントは言っちゃいけないんだけどよ、俺は明日から作戦行動に入る」
霊幻の足が止まる。
「しばらく会えないし、生きて帰れるかどうかも分からない。でも、俺が死んだらお前に伝わるようにだけはしてくれる、って上層部が……」
言い終わる前に霊幻が俺を抱きしめた。
「今日と変わらない明日が、待っているとして」
ぎゅ、と柔らかい金糸が頬を撫でる。
「それがお前の命懸けの闘いで守られていることを、誰もきっと知らないんだろうけど」

俺はその金糸を吸う。……たまらない匂いがした。最高級の、煙草だ。
「俺だけは、少なくとも俺だけは、お前が俺を守ってくれていることを、俺が同じ今日を過ごせることを守ってくれていることを、ちゃんと知っているから」
―――っ
「安心して行ってこい、俺の英雄（ヒーロー）」
俺は涙を一粒だけこぼしながら、霊幻をキツく抱きしめる。
「……いってきます」

俺は帰ってくる。

世界でここでだけしか吸えない、吸わないと生きていけない、金糸の煙草を吸うために。

完